

## “和敬清寂”のところに触れて

宮城県仙台二華高等学校3年（宮城県）

三浦 莉乃

蝉の声がきこえる。夏だ。高校2年生の夏休み、外では太陽がジリジリと音が聞こえそうなほど強く地面を照らす傍ら、私は御園棚に広げられたお道具と向き合っていた。私たちの代は部員が五名で、20名以上いた先輩方が引退してからは少し寂しくなった茶室で悠々とお稽古ができるようになった。夏でも十分な換気が推奨されるコロナ禍だ。窓を開けている分、隣のコートで練習するテニス部の気合いの入った掛け声と蝉の声とが鮮明に耳に届き、より一層茶室の静けさを際立たせている。

茶道の世界はとてもゆっくりと時間が進む。緊張して鼓動が速くなっていく自分の心臓の音が、お客様に聞こえてしまわないだろうかと不安になるほど静寂とした茶室で、心を込めて薄茶を点てる。私はそんな空間が大好きだ。釜の蓋を開け、湯気が飛んでいったあと水面を覗くと、勉強への焦燥、友人関係の悩み、そして、終わりの見えないコロナウイルスへのどうしようもない憤怒など、心の中の悶々とした思いが映り込んでくるような気がして、自分自身と対峙する大切な時間になっていると思うからである。

昨年4月、「仙庵」寄贈50周年記念講演会にて、鵬雲斎大宗匠のお話を拝聴できる機会をいただいた。仙庵は私が通う仙台二華高の前身となる女学校を卒業なさった、大宗匠のお母様の千嘉代子様が仙台市に寄贈されたものである。特攻隊として出撃する戦友に配給の羊羹を切って茶を点てたこと。「一盃からピースフルネスを」という言葉を掲げ、平和のために世界中を訪れ続けていること。一碗のお茶を勧め合うことこそが対立を止める原動力となること。父母からもらった命の大切さ。“想いでの数々”と題された御言葉は、茶道に励む一人の人間として、争いの絶えない世を生き抜かなければならない者として、心に留めておきたいものばかりだった。写真撮影の際には、大宗匠に「頑張れよ」と肩に手を触れながら、柔和な眼差しでお声をかけていただいた。その一言で、先ほど心に刻まれた言葉の重みがさらに増した気がした。

夏休みが終わると瞬く間に文化祭の時期がきた。コロナ禍以前の様子を知る人はおらず、手探りで準備を進めるのはとても不安だった。まして、私は部長を任されていたのだ。周囲の人は「気負いすぎる必要はないよ」と言ってくれたが、今思い返すと、失敗したら茶道部の名に傷をつけることになるから自らプレッシャーをかけてしまっていた部分もあったのかもしれない。新しい形での茶会のスタートに相応しいものにできるように、部員全員で知恵を出し合い、最善を尽くした。文化祭は、いざ始まってしまえば本当に楽しい時間だった。慣れない浴衣を着て、胸の高鳴りを感じながらお点前をし、お茶を差し上げる。お香の香りに包まれ、いつも教室で顔を合わせる友人が客として大勢並んでいる茶室は、入学当初から「ソーシャルディスタンス」が痛いほど叫ばれていた私にとって、非常に新鮮であった。この後も、修学旅行で御家元を訪ねる中学生を対象とした茶道体験会やハワイ大学からの留学生をもてなす茶会を開催することができた。茶道の基本を改めて言葉で説明しようとする、自分の学びの甘さに気づか

される。それでも、差し上げたお茶を笑顔で楽しみ、満足した様子で茶室を後にするお客様の姿を見れた時は、何よりも嬉しかった。大宗匠が仰っていたように、一碗のお茶があればどんな人とでも心を通わせることができるのだ。本当に素晴らしいことである。

私はこれからもずっと茶道を続けていきたい。忙しく過ぎる日常の中に、一瞬でも自分自身と向き合うときがあったら、それだけで幸せだと思うからだ。茶道が与えてくれるこのひとは、私の人生においてかけがえのない時間になると確信している。